

蔑視している傾向にある。ラスタファリアニズム運動と異なり、ブラックムスリムは「アフリカ(エチオピア)系」ではなく、「アジア系」としてのアイデンティティを前面に押し出しており、汎アフリカ的なアイデンティティを否定している。また教団は分離主義を掲げており、ブラックムスリムの神話的去におけるメッカのような黒人のみの国を建国しようとしている。それはラスタファリアニズム運動が掲げるような特定の土地への帰還というよりも、過去への回帰である。重要なことは、両宗教において、奴隷制度の記憶を乗り越えるために実際のルーツである西アフリカの記憶が完全に忘却され、別の民族的な記憶が神学的に想起されているということである。

アンテベラム期アメリカの 宗教とジャーナリズム

佐藤 清子

アンテベラム期のアメリカ合衆国は、信仰復興が盛り上がりを見せた福音主義の時代であると同時に、移民の増加によるカトリック教会の成長が著しい時代でもあった。二十世紀半ばに至るまでに、アメリカ合衆国はプロテスタントが主流を占める社会から、宗教的多様性によって特徴付けられる社会へと変遷を遂げるが、変化は単なるなし崩しの多様性の増加によってのみならず、それを積極的に肯定する議論の成熟によって後押しされていた。そうした議論の発展は、反カトリック主義が高ま

るアンテベラム期において既に見いだすことができる。

本発表は、ジェームズ・ゴードン・ベネット (James Gordon Bennett) が一八三五年から編集・発行した大衆日刊新聞、『ニューヨーク・ヘラルド (The New York Herald)』における、カトリックとプロテスタントの対立の取り扱いに注目する。ベネットは、多数派であるプロテスタント、特に福音派のプロテスタントが、合衆国の文化や道徳をプロテスタンティズムによって規定しようとした時代にあつて、それとは異なる視点で宗教問題を扱った。ベネットのカトリック教徒としての背景は、彼の宗教への態度に影響していると考えられるが、彼は同時にカトリック教会からも距離をおいて、時にプロテスタント以上に痛烈なカトリック教会批判を行っている。

『ヘラルド』は、反カトリック主義者がカトリック教会のキャンペーンをでっちあげた「マリア・モンク事件」に際しては、反カトリック主義者を批判し、アメリカ合衆国を、カトリック、プロテスタント双方が自由な宗教活動を行うことの出来る空間として特徴付ける議論を展開した。その一方、一八四〇年代、ニューヨーク市の学校における、プロテスタント的宗教教育に対してカトリックが反発し、教区学校への公的予算配分を求めた「学校問題」に際しては、『ヘラルド』は、カトリック教会のニューヨーク司教、ジョン・ヒューズが、政教分離原則を冒して政治の領域に踏み込んだとして、厳しい攻撃を加えた。この見解は、公共空間を宗教的に中立なものと定義づけようとする点において、マリア・モンク事件以来一貫しているといえる。しかし同時に、この件に関するベネットの立場は反カ

トリック的なプロテスタントに近いものであり、その新聞の影響力ともあいまって、後にベネットはヒューズから「危険人物」として名指しで批判を受けることになった。

ベネットと『ヘラルド』の存在は、当時より一層の重要性を持ちつつあった世俗のジャーナリズムという領域が、宗教を単にニュースとして取り扱うのみならず、その社会における意義や役割などを論じる場として働いていたことを示す好例であるといえる。また、その立場は、教派ごとの対立の構図が未だ濃厚であった十九世紀前半において、プロテスタントにも、カトリックにも過度に同一化することのない独自のものであり、当時の合衆国における、人々と宗教の関わりの一つのあり方を示している。

現代日本社会における宗教と暴力

——オウム真理教と「すぴこん」——

橋 迫 瑞 穂

一九九五年にオウム真理教が引き起こした地下鉄サリン事件は、宗教が暴力を社会に向けて露わにしうることを示した事件として人びとに受けとめられた。ところが、二〇〇〇年代に入ると、「スピリチュアル・ブーム」という形で新たな宗教ブームが多くの支持者を獲得するようになった。「スピリチュアル・ブーム」は、実際には八〇年代の宗教ブームを引き継いだもので、オウム真理教とともに島蘭進のいう新霊性運動・文化

の流れを汲むものである。このように、「スピリチュアル・ブーム」はオウム真理教と同じ系譜に属しながら、今のところ突出した暴力事件を起こしてはおらず、暴力の点でオウム真理教と対照的な位置にあるのはなぜだろうか。この点を明らかにするには、オウム真理教による突出した暴力事件の担い手は主として男性幹部信者であったのに対して、暴力をあらわにしている「スピリチュアル・ブーム」ではもっぱら女性たちが中心的な担い手であることに注目する必要がある。このような観点にたつて、本発表は、新霊性運動・文化を共通の母胎としながらも、暴力の点で対照的なオウム真理教と「スピリチュアル・ブーム」を、それぞれの宗教における女性と男性の意識の相違に注目して、比較することで、現代日本社会における宗教の暴力について検討することを目的とする。

オウム真理教の男性信者らの手記からは、自らの存在への不安に対して、教団での修行は救いをもたらすものと受けとめられていたことが伺われる。だが、その修行は、自らに暴力を加えることにはかならず、そこに暴力の萌芽を認めることができる。さらに、男性信者らは教祖麻原を中心とする新しい「世界」の創出にも向けられていた。地下鉄サリン事件をはじめとするオウム真理教の暴力事件は、明確な「敵」を自分たちの外に設定し、暴力を向けることで、その新しい「世界」の創出を目指すものだったのである。女性信者たちも男性信者たちと同様に、「私」の創出を求めて修行に没頭したが、彼女たちは、新しい「世界」の創出には関心が薄く、教祖麻原にもそれほど魅了されていなかった。「スピリチュアル・ブーム」に集う女